

つながりを育む教育課程の編成と運用

～離島の強みを生かした特色ある学校づくりをめざして～

唐津市立馬渡小中学校
校長 原口 真

1 はじめに

唐津市は佐賀県の北西部に位置し、古代から唐など大陸への玄関口として栄えてきた。近郊の海には高島をはじめとして7つの島々がある。その中でも旧呼子町、鎮西町に属する小川小中学校、加唐小中学校（松島小学校は休校中）、馬渡小中学校の北部離島3校はいずれも定期船等での通学・通勤が困難でへき地指定を受けている。学校の成立状況や地理的関係の近さから相互に交流や協力を行ってきた経緯がある。現在、3校の校長同士も緊密に連携や情報共有を行って学校運営を行っている。本稿では離島の学校特有の状況に触れながら、教育課程の編成と運用における創意について述べることにする。なお、提言内容は中学校を主体としつつも、小中一体となった教育活動を行っていることから必要に応じ小学校の状況にも触れることとする。

2 主題設定の理由

令和2年5月策定の「全日中新教育ビジョン」の取組の方向7「学校と社会の相互連携・協働を促進し、「生きる力」を身に付けさせるための教育課程の編成」においては、「よりよい社会の創造へとつながるためには、学校教育の中核となる教育課程も社会とのつながりを意識する必要がある」と述べられ、「社会に開かれた教育課程」を編成することの必要性が訴えられている。

教育課程の編成において、社会とのつながりを勘案することはもちろんだが、北部離島3校においては各学年における児童生徒数が1～4名と極小規模での教育活動を行っており、一人で学習する場合も多い。小川、加唐、馬渡の3校の児童生徒在籍状況は以下の表の通りである。

表1 北部離島3校の在籍状況（令和7年5月1日時点）

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	小計	中1	中2	中3	中計	小中計
小川	0	2	1	3	1	1	8	0	2	2	4	12
加唐	0	2	0	2	2	1	7	1	1	0	2	9
馬渡	1	1	1	1	1	3	8	1	4	1	6	14

へき地指定を受ける離島の学校であり、交通的不便かつ在籍数が極小であることから物理的な交流機会は、陸部の学校と比較して極めて少ない。また、地域活性化のため「からつ七つの島活性化協議会」が行っている「宝探し留学」事業による離島留学生は1～2年間を島で過ごす。子ども、地域とのつながりがいない状態で入ってくる。

このような状況下においては、地域社会とのつながりを育むことと同等かそれ以上に、異年齢・異世代の関係づくりを進め、子どもの日常的なつながりを生み出す教育課程を意識的に行う必要がある。子どもが点として存在するのではなく、つながりのある線、面になる働きかけを通して社会性を育むために、唐津地区の北部離島3校がどのような取り組みを行っているの

かを検証することを本研究のねらいとする。この検証を通して各学校が離島ならではの「強み」を生かした教育活動をどのように実践し、これからの社会を生き抜くための資質・能力をどのように育んでいるのかを明らかにできるのではないかと考え、本テーマを設定した。

3 研究の視点

- (1)-1 校内の子どもたち同士をつなげる取組み
- (1)-2 子どもの出番を増やす取組み
- (2) 子どもたちと地域をつなげる取組み
- (3) 島外の学校とつなげる取組み

4 研究の実際

北部離島3校の校長で研究の視点を確認し、各学校で行っている「つながりを育む」取組みを上記4つの視点からまとめる活動を行った。詳細は以下の表のとおりである。(主に令和6年度)

表2 北部離島3校の子どものつながりを育む取組み

	小川小中学校	加唐小中学校	馬渡小中学校
(1)-1 校内の子どもたち同士をつなげる取組	スピーチ活動	ランチルームでの給食スピーチ	たて割り班活動 目標の樹 いいねカード
(1)-2 子どもの出番を増やす取組	体育大会 文化祭	ゆうき会（児童生徒会）	夢プレゼン 堤防壁画制作
(2) 子どもたちと地域をつなげる取組	島内清掃（ノハラノウラ） 老人会との交流（グラウンドゴルフ、もちつき会） ワカメ養殖（R7） 文化祭 職業講話	島内清掃（加唐、松島） 島民体育大会 文化祭 カリオ灯台への遠足 ペットボトルキャップ回収 ゲートボール交流会 落とし込み釣り体験（R7） 版画カレンダーづくり SUP体験	地域清掃（馬渡港） 島民合同運動会 文化祭 島内駅伝 老人憩の家訪問 年賀状書き ふぐ稚魚放流体験 馬渡饅頭づくり体験 干物づくり体験
(3) 島外の学校とつなげる取組	北部離島3島交流 リモート授業交流 玄海みらい学園との交流 呼子小学校との交流 離島3校スピーチ交流	北部離島3島交流 リモート授業交流 海青中学校との交流 名護屋小学校との交流	北部離島3島交流 リモート授業交流 海青中学校との交流 名護屋小学校との交流

上記のうちから各学校のいくつかの取組みの実際を述べる。

(1)-1 校内の子どもたち同士をつなげる取組み

① たて割り班レクリエーション（馬渡小中学校）

今年度の馬渡小中学校は小学生8名、中学生6名の計14名で、9学年のうち7学年は1名在籍である。また、小学生8名のうち半数に当たる4名は離島留学などで今年度初めて本校に来た子どもである。このような状況であることから、異学年交流を通して子ども同士の親睦を深めることをねらいとして2グループの縦割り班を編成し、年間を通して計画的にレクリエーション活動を行っている。

各学級（本校は複式学級）の児童生徒が毎月交代で種目を担当し、レクリエーションの実施方法の説明と運営を行う。担当する児童生徒には各学級担任が事前にアドバイスをを行い、自力で説明・運営する見通しを持たせるように支援している。種目は2班対抗になるものを選択して実施することで縦割り班のつながりを強めて、上級生を含めコミュニケーションを取りやすくなること、下級生を思いやる態度を育むことをねらいとしている。また、レクリエーションを担当した子どもは自分の力で全校児童生徒を動かし楽しませる出番を得て役割をやりとげることで承認され自信をつけることにつながっている。



【写真1 縦割りレクの様子】

この縦割り班活動は、歓迎遠足や島民合同運動会等も含めて年間を通して計画的・継続的に行うことでより効果を高めるように実施している。

1学期末に実施したふりかえりアンケートでは、「学校の勉強や生活、行事の中で他の人の良さを見つけることができた」の項目で「そう思う」71%、「どちらかといえばそう思う」29%と高い値を示した。縦割り班活動を含め教育活動全体を通して児童生徒のつながりを育むことを意識したこと、小人数だからできる全校的な活動を仕組んでいることの成果と捉えている。

② スピーチ活動（小川小中学校）

小川小中学校は小学生8人、中学生4人の計12人（令和7年度）である。小3、5、6年生は学年1人在籍のため、1人で授業を受けることが多い。そこで、小中別スピーチ及び小中合同スピーチを通して、子どもたち同士をつなぐ取組を行っている。この活動は30年以上続いている。

ア 小中別スピーチ

小学校スピーチは毎週1回、中学校スピーチは毎週行っている。児童生徒は年間一人当たり2度行うよう計画している。小中どちらも3～5分程度のスピーチを聞いて、意見交流を行っている。

小学校スピーチは、前年度までの「人前で自分の言いたいことを効果的に伝える」から「スピーチ後の交流を通して思考を深める」に指導の重点を置いたことで、独りよがりのスピーチテーマが減り、スピーチ後に即興で感想や意見交流を行う時間が増えた。

中学校スピーチは、佐賀新聞から気になるニュースを切り抜き、記事の概要説明の後に、自分たちの身近な話題に発展させて意見交流を行っている。発表者は、聞き手の感想に対するコメント力や広がる意見をまとめる力が付いてきた。一方で、中学生4人だけでは意見の深まりに限界があるため、令和7年度6月に馬渡中学校とオンラインでつないでスピーチ交流を行った。今後、加唐中学校ともオンラインのスピーチ交流を計画し



【写真2 小中合同スピーチ】

ている。

イ 小中合同スピーチ

年間2回全校児童生徒で行っている。小中1人ずつ発表し、聞き手が質問したり、感じたことをコメントしたりして小中学生をつないでいる。振り返りアンケートで最も多かった感想は、小学生が「中学生からスピーチ後の意見交流の進め方を学べた。」、中学生が「小学校低学年の児童にも分かりやすいスピーチを考える機会になった。」だった。

(1)-2 子どもの出番を増やす取組み

① 「ゆうき会」(児童生徒会)の取組み(加唐小中学校)

加唐小中学校には、令和7年度現在、小学生7名、中学生2名の計9名が在籍している。こうした極小規模校においては、一人ひとりの児童生徒が学校生活の中でどれだけ役割を担い、自ら関わっていくかが教育活動の質を大きく左右する。そのため本校では、児童会・生徒会にあたる「ゆうき会」の活動を通じて、子どもたちの主体性と自律性を育むことを重視している。



【写真3 ゆうき会の話し合い】

これまで「ゆうき会」の活動は全校児童生徒で企画・運営していたが、本年度からは運営体制を刷新し、「保体部」「生活部」「文化部」の三部会に分けて活動する形式を導入した。

これは、役割分担の明確化と活動の幅の広がりをねらったものであり、同時に、生徒会長に仕事が集中するリスクを避ける工夫にもなっている。

たとえば、保体部は島民体育大会に向けて、スローガンやパネルの作成、司会進行までを担った。また、地域住民から応援メッセージを募り、体育館に掲示するといった新たな取組も提案・実行した。これらの活動は、各部会で原案を検討し、ゆうき会の全体会で承認されるという流れで行われている。

児童生徒の活動を支えるため、教職員も三部会に分かれて支援体制をとっており、子どもたちの主体的な動きを促している。活動後の振り返りでは、「みんなで話し合っスローガンを決められた」「時間に間に合うよう役割を分担して動けた」といった感想が聞かれ、責任を果たした充実感や達成感が見られた。中高学年のリーダーシップ発揮とともに、中学年や低学年の児童も自分たちにできる役割を見つけて動くようになっており、全校的な協働と成長の場としての「ゆうき会」の意義がより深まっている。

② 夢プレゼンの取組み(馬渡小中学校)

自分の良さを伸ばしお互いの良さを認める取組みとして児童生徒一人ひとりが将来の夢を語る「夢プレゼン」の活動を行っている。児童生徒が夢について発表する「出番」を設定し、発表する「役割」を教師の支援を受けつつ果たし、発表したことを含めて「承認」することで児童生徒の責任感や自信を育てることをねらいとしたものである。



【写真4 夢プレゼン(生徒)】

1学期はまず教師が夢を語る「夢プレゼン」を行った。プレゼンテーションのモデルを示すとともにさまざまな夢に触れさせることをねらいとしたものである。毎月1回の小中学校別朝会の時間を活用し、学生時代に打ち込んだ部活動や趣味、自分の推し、教師を志した理由や教師以外になりたかった職業などなどさまざまな視点から自分の夢を語った。

2学期は児童生徒による「夢プレゼン」を行った。「パティシエ」「航海士」「起業家」「建築士」「美術に係わる仕事」などそれぞれの将来の夢や目標を語るとともに、実現する

ためにどのような道筋をたどるのか、どんな努力をこれからしていくのかなど将来の生き方について考えるきっかけとなった。

また、「夢プレゼン」とセットで「いいねカード」の取組みを行った。児童生徒の夢プレゼン発表に合わせ、発表した児童生徒の良さを全校児童生徒及び教師が「いいねカード」に記入しまとめて掲示することで「承認」を行った。ふりかえりのコメントからは「人の良さに気づけるようになった」「自分では気づけない良いところに気づくことができた」「みんなの良いところを見つけると自分も明るくなることに気づいた」などと新たな気づきに肯定的な受け止める様子が多く見られた。

昨年度2学期末に実施したふりかえりアンケートでは、「自分にはよいところがあると思う」の項目で「そう思う」43%、「どちらかといえばそう思う」50%、「他の人の良さを見つけることができた」の項目で「そう思う」71%、「どちらかといえばそう思う」21%と高い値を示した。夢プレゼンを通して「出番」「役割」「承認」のプロセスを取り入れ、自己開示し互いに受け止めることで、児童生徒のつながりを育むことにつながっている。お互いの良さを受け止めやすい小人数の環境を生かした取組みの成果と捉えている。

(2) 子どもたちと地域をつなげる取組み

① 老人会とのもちつき交流及びワカメ養殖（小川小中学校）

ア 老人会とのもちつき交流

かつて小川島では、各家庭でもちつきを行い、正月を迎えていた。しかし、人口減少により、現在は数軒しか行っていない。老人会では、社会福祉協議会の支援でもちつき会を行っていたが、参加者が少なくなっていた。小中学生との合同もちつき会について老人会は、「子どもから元気をもらおう。」「もちつき文化が続いていくことが嬉しい。」と好評である。令和7年度は、ついた餅を参加できない独居老人宅に小中学生が配って、更に地域とつながるよう計画している。



【写真5 もちつき交流】

イ ワカメ養殖

地球温暖化の影響は小川島でも深刻で、基幹産業であるイカ釣り漁は不漁が続いている。そのような中、令和6年度に中学生が総合的な学習の時間に、小川島の伝統料理である「ウニめし」を作った。このときに、生徒たちは、温暖化の影響でウニの実入りが悪くなっていることを知り、ウニめしが将来作れなくなるかもしれないと感じた。そこで、令和7年に玄海水産振興センター所員を招き、ウニの実入りが悪くなったのは、ここ数年でエサとなるワカメや海藻が消えたことが原因だと学んだ。あわせて、小川島漁協がワカメ養殖を試験的に取り組んでいると聞いた。そこで、生徒が漁協に打診したところ、漁場の一部を提供してもらうことになった。この養殖体験は令和7年秋から始める。漁協や専門家とのつながりを通して、地域の産業を考えるよい機会となることを期待している。

② 地域の自然、文化、人とつながる活動（加唐小中学校）

加唐小中学校では、教室内の学びにとどまらず、地域社会と深く関わる教育を展開している。これは、離島という地理的特性を活かし、自然や文化、人々とのふれあいを通して、児童生徒のふるさとへの理解と愛着を育むことをねらいとしている。

地域の人々が生活の中で守り育ててきた知恵や技術、自然の恵みなどは、本校にとってかけがえのない「教材」である。こうした地域資源を最大限に活用しながら、「本物の体

験」を通じて学びを深めることを重視している。

例年、変わらない活動としては次のようなものがある。

5月 春の遠足／加唐島・松島 島民体育大会／加唐島 島内清掃

10月 文化祭／ゲートボール交流会

11月 松島島内清掃

12月 版画カレンダー（地域を題材としたカレンダーを作成し、地域に配付）

昨年度は、加唐島の自然を活かしたSUP（スタンドアップパドルボード）体験を実施し、児童生徒は初めての海上活動に挑戦した。活動後の振り返りでは「海に囲まれた島だからできる特別な体験だった」という声が多く、地域の自然を学びの場とする意義を再認識する機会となった。



【写真6 SUP体験】

今年度は、隣接する離島「高島」への遠足を行い、加唐島との違いに気づく学習を行った。高島には平坦な道や観光地があり、加唐島との生活環境の差を体感的に学ぶことができた。11月には、漁業体験や料理人の職業講話を予定しており、漁師の仕事を直接体験することや、地域食材を活かす料理の工夫を学ぶことで、暮らしと産業への理解を深めるねらいがある。

こうした活動を通じて、児童生徒からは「島の人のすごさを実感した」「島の違いから、そのよさを改めて考えた」などの反応が聞かれており、学びの質が深まっている。今後は、活動の恒例化による形骸化を避け、各学年の発達段階に応じた学びにつなげる工夫とともに、地域の方々と“協働”する体制の構築を目指していく。

③ 地域を題材にした総合的な学習の時間の取組み（馬渡中学校）

馬渡中学校では総合的な学習の時間で地域を題材にした課題を設定し、文化祭で探究活動の成果を発表している。例えば令和6年度の探究活動は以下の通りである。

ア グループ探究

- ・馬渡饅頭について調べよう
- ・戦争体験を語り継ごう

イ 個人探究（「島の魅力プレゼン」）

- ・島に捨てられたものをリサイクルしよう（流木で椅子づくり）
- ・イノシシ捕獲について調べて食材として活用しよう（イノシシハンバーグ）
- ・島の人を笑顔にしようプロジェクト（絵と書道作品を島民に届ける）
- ・島の固有の果実を調べて食材として活用しよう（ゲンコウサイダーとマーマレードづくり）

上記のように、馬渡島の歴史や文化、課題について島民の方に取材したり、コミュニケーションを取ったりすることを軸に探究活動に取り組み、プレゼンソフトを活用して効果的な発表につなげている。

たとえば、老人憩の家を訪問して戦争体験を語ってもらいインタビューを行った。馬渡島に陸軍、海軍それぞれの駐屯地があったこと、空襲警報が何回も鳴る度防空壕に隠れていたこと、島に飛行機が墜落したこと、鉄の供出のため島の教会の鐘も持って行かれたこと等、自分たちの身近で戦争が起きていたことを地域の老人に学び、戦争を二度と起こしてはいけないとの思いをまとめて発表した。



【写真7 戦争体験インタビュー】

また、作物を荒したり生態系に影響を与えたりするイノシシを捕獲している島民を講師として招いて、罠を仕掛ける場所やイノシシの仕留め方を知り、また食肉としての処理の仕方を学んだ。探究活動を行った生徒は教師の支援を受けてイノシシ肉を使ったハンバーグづくりに挑戦し、その過程をプレゼンテーションにまとめて発表した。

このように地域の方との交流を通して自分たちの学びを深めるとともに、語り継ぐべきことや島の課題にどう向き合い解決していくかの提案を行っている。

(3) 島外の学校とつなげる取組み

① 呼子小学校及び玄海みらい学園との交流（小川小中学校）

多様な意見に触れて考えを深めたり、大人数でしかできない体験を行ったりすることを目的として、近隣の学校との交流授業を行っている。

ア 呼子小学校との交流

令和6年度は小川小学校3・4年生と呼子小学校4年生が相互訪問を行った。両校に共通する捕鯨文化について総合的な学習の時間を活用して意見交流を行った。「呼子にも小川島にも鯨の供養塔があり、共に鯨を大切に扱っていたことが分かった。」と考えるの深まりが見られた。令和7年度は全校児童が呼子小学校を訪問予定である。

イ 玄海みらい学園（後期課程）との交流

令和7年度は2回計画している。7月の交流授業では、「自己紹介の挨拶は緊張したが、普段のスピーチでも人前で話すことには慣れていたのでよかった。」、「体育のバレーボールの授業で、同い年の友達と試合前に円陣を組んだことが嬉しかった。」、「理科の授業では、一人で顕微鏡を使って考察するが、グループの友達の考察は少しずつ違って、自分の考察を書き直した。」など一定の成果が得られた。



【写真8 玄海みらい学園との交流】

② 3島交流（加唐小中学校）

加唐小中学校・小川小中学校・馬渡小中学校では、地域内だけでなく、他の離島の学校との連携を通して、児童生徒の人間関係の幅や学びの多様性を広げることを目的に、北部離島学校相互訪問交流会（3島交流）を実施している。これまでは2島間の交流を複数回行ってきた（例 R6年 馬渡→加唐、加唐→小川、小川→馬渡）が、令和7年度からは一つの島に他の2校が集まる形で3島一斉の交流を実施することになった。

令和7年度は、加唐島を会場に交流会を開催した。小学校では、学年別に交流授業を行い、道徳や学活の時間を共有した。水泳やレクリエーションでは、異年齢・異校種の枠を超えた関わりが自然に生まれ、児童同士の距離が縮まった。中学校では、初対面の相手と自然に話せるようにすることを目指したアイスブレイクや、総合的な学習の時間を使った地域学習の発表を通じて、島への思いや誇りを共有する場が生まれた。

児童生徒からは「最初は緊張したが、最後には楽しく話すことができた」「他の島の発表から学ぶことが多かった」などの感想が寄せられ、交流を通じた自己成長や他者理解の促進が見られた。また、「普段はできない大人数での活動が楽しかった」という意見もあり、小規模校ならではの制約を乗り越える貴重な体験となっている。



【写真9 三島小中交流レク】

3島交流は、単なる交流行事にとどまらず、離島という共通の背景を持つ学校同士が、

島を越えてつながり学び合う「教育共同体」として連携する土台となりつつある。今後は、対面の交流に加え、オンラインによるスピーチ発表会なども視野に入れ、継続的な学びの関係づくりを進めていきたい。

5 成果と展望

(1) 成果

- ① 学年ごとの人数が極小であるため、異年齢間の子どもたちとの関係を形成する活動の必然性が高い。全校的なスピーチやプレゼンテーションで自分の思いを伝えたり、他者の良さを認めたりする活動を計画的に組み込むことで、自己肯定感情や共感的人間関係が形成されている。
- ② 児童生徒会や運動会・文化祭の運営や話し合い等で、自分たちの役割を意識した企画や合意形成を行わせることで、リーダーシップとフォロワーシップが育まれている。児童生徒一人ひとりが誰一人取り残されことなく自分事として主体的に行動する姿が見られている。
- ③ 海に囲まれた豊かな自然環境と歴史・文化に恵まれ、地域の人的資源や環境、実態から活動づくり、課題づくりを行うことで探究的態度と問題解決思考を育んでいることが分かった。地域の方との交流が深い学びにつながっている。
- ④ 島外の学校との交流活動を通し、極少人数では体験できない同年齢集団との対話・協働の学びを行うことができた。また離島で学ぶ子どもたちが島を越えてつながることで教育共同体としての機能を果たしている。また、自分の学校や島の価値を再認識することにつながっている。

(2) 展望

- ① 学校規模の縮小は今後も続く。児童生徒数減少に応じ、校内における人的交流の密度が下がることが予想される。子どもが点として孤立しないよう、つながりを育む教育課程を意識して編成する必要がある。
- ② 地域との連携活動は継続的に行っているが、毎年恒例として形骸化するおそれもある。ねらいを明確にして成長の段階に応じた学びにつなげる工夫が不可欠である。地域協働を進め、「ともに教育をつくるパートナー」となるためには校長のリーダーシップが求められる。
- ③ 同年齢集団の少なさから高校入学時に人間関係を築くことに苦労する離島卒業生は多い。島外の学校との交流は必要性が高い。北部離島三島交流は实际的に訪問することをきっかけとして、対話・協働のよき相手としてオンライン交流の活性化につなげたい。

6 おわりに

北部離島3校はそれぞれ学校の置かれた環境や課題に応じて特色ある教育課程を編成し運用している。その際に子どもたちのつながりを育むよう工夫・改善していることを明らかにすることができた。人数が少ないゆえに人数規模がある学校と同様にはできないことも多々あるが、密度が濃いコミュニケーションの中で人間関係形成・社会形成能力を育み、郷土の豊かさの中で学ぶことで課題設定・解決力を高めている。校長が3島の「教育共同体」としての機能に着目したうえで学校経営のリーダーシップを発揮することが教育活動の質を高めていく。離島が持つ課題をマイナスとするだけでなく、離島だからできる教育活動をこれからも提案・発信していきたい。